

【 16 】

氏 名	溝 川 喜 一 みぞ かわ き いち
学 位 の 種 類	經 済 学 博 士
学 位 記 番 号	論 經 博 第 14 号
学位授与の日付	昭 和 42 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	古典派経済学と販路説

論文調査委員	(主 査) 教 授 出 口 勇 蔵 教 授 中 谷 実 教 授 松 井 清
--------	--

論 文 内 容 の 要 旨

古典派経済学の発展の過程で、販路説は特別に重要な意味をもっており、現代の経済学はこの理論の超克の上に展開されているといえる。本論文の著者は、こういう意味をもつ販路説の経済学説史的研究をこころざしたのであるが、その場合の分析の視角は、古典学派にぞくする個々の経済学者の体系の有機的な構成の一環として、それぞれの人の販路説を検討することである。

つぎに、一般に販路説と名づけられる理論も、厳密にいうと、ジャン・バティスト・セーによるものとジェイムズ・ミルによるものとの二種があることが指摘され、これらの二種の理論が刻明に研究され、ついで、リカード、トレنز、ローダデール、およびマルサスにおいて、販路説がいかに展開し、これらの古典経済学者が販路説を否定することになる恐慌現象を販路説とどう調和させ、どう連関させたということとを明らかにされている。

以上の研究成果を7章にわかって叙述されてあるのが、本論文の内容をなす。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

著者、溝川喜一氏がこの著述において期するところは、19世紀前半期における西ヨーロッパの経済学界を、販路説を中心として概観することであった。この課題を理論史的研究方法でもって解くのが本書の意図であった。

この著書は、わが国における販路説研究のまとまったものとして、画期的なものであると同時に、清新な内容を蔵している。その新しさについていうと、第一に、これまでの多くの研究のように、販路説の主張者のそれぞれの見解だけを取り出して比較するというのではなく、それらの人の経済学の体系の内部における販路説の位置をみきわめた上で、この理論を比較研究している点である。このような研究態度によって始めて、販路説によってとり上げられる経済現象の理論的意味づけが人によって異なることが判明し、販路説の学説史研究として、本書は従来のもよりも一歩すすんだものとなりえたのである。

本書の第二および第三の特徴は、上の研究態度から生じた。すなわち、第二に、普通には販路説はセーの法則といいかえられているのだが、厳密に学説上からいうならば、販路説とは、セー法則とはことなるものだと言われるのが、本書の特徴である。販路説は学説史上に実在するが、セーの法則なるものは、ケインズによって造成された概念にはかならぬというのである。第三に、同じ販路説といっても、フランスのジャン・バティスト・セーの説とイギリスのジェームス・ミルの説との間には、明確な区別を考えねばならぬ、とした点である。すなわち、前者においては、販路説は交換論的、価格論的な意味での均衡が需要と供給とのあいだに成り立つとされるのだが、後者においては、資本主義的生産の理論の上に立って、生産物剰余の実現と資本の移動と蓄積の進行、利潤率の平均化を主張する理論として提出されたものであったというのである。この最後の特徴は、この著書がしめしえた特にすぐれた点であって、現在すでに学界において高く評価されており、今後の研究の里程表となるものである。

著者はつぎに販路説が、リカード、トレンズ、ジョン・ステュアート・ミル、ローダデール、およびマルサスにおいて、いかに踏襲され、変形されていったかを刻明に見きわめている。

本書には、著者の経済理論上の立場が必ずしも明瞭には出ていない。マルクスの蓄積論に近いものが暗示されていて、ケインズの立場に批判的であることがときどき説かれるという程度である。こと望蜀にぞくするけれども、これが本書について指摘される欠陥である。しかしながら、文献の精密な読み方と独自の判断、そして他人に依りかからぬ執筆態度など、いずれの点においても、高い研究水準をしめしており、わが国の経済学史界における近來の一収穫であるといえる。

本論文は経済学博士の学位論文として価値あるものと認められる。